

# 俳優デヴィッド・ガルピリルのこと

まつやまとしお  
松山利夫  
民博 民族文化研究部

専攻は文化人類学。一九八〇年代初めよりオーストラリア先住民研究に従事。編著書に『ブラックフェラウェイ・オーストラリア先住民アボリジナルの選択』御茶の水書房（〇〇六ほか多数）

オーストラリアで製作された映画のなかで、日本では一九八七年に上映された『クロコダイル・ダンディー』は、気楽に観ることのできる楽しいお話だった。だが二〇〇三年二月に公開された『裸足の一五〇〇マイル』と、二〇〇九年二月末からロードショウがはじまった

『オーストラリア』とは、それぞれの時代のオーストラリア事情やアボリジナル政策を背景にしているだけに、いろいろと考えさせられる映画だった。

## ●民博ではアボリジナル・ダンサーとして公演

そのいずれにも登場するアボリジナルの俳優が、デヴィッド・ガルピリルである。彼は一九七〇年の大阪万博にアボリジナル・ダンサーとして来日したところから、映画スターの道を歩みはじめていた。その彼を国立民族学博物館は一九八五年六月一日に、「ラマンガニング・ダンスグループ」のリーダーとして招聘した。それは「科学万博―つくは85」（国際科学技術博覧会）での六月一八日のオース



市立博物館館長）の「オーストラリア・アボリジニの文化」と題する講演につづいて、「歓迎の歌」から「白いオウム」に「カンガルー」、そして「フクロウ」にいたるまで三人のダンサーとともに一〇曲の歌と踊りを披露してくれた。それは『クロコダイル・ダンディー』の公開より少し前のことだった。

## ●五〇歳をこえて磨きがかかる

その後デヴィッドが出演する映画で私が観たのは、一九三一年のオーストラリアを舞台にした『裸足の一五〇〇マイル』だった。この映画で彼は、収容施設を脱走した三人の少女を追跡するアボリジナル・トラッカーに扮していた。この時期のトラッカーは、辺境に逃げ込んだ犯罪者

などを足跡から特定して追跡する警察の一員で、その隊員のほとんどがアボリジナルであった。また一九三九年から四〇年代前半の北オーストラリアを描いた映画『オーストラリア』では、デヴィッドは超自然的な能力をもつ呪術師



であり、アボリジナルとヨーロッパ人とのあいだに生まれた孫ナラの守護者として登場する。それは五〇歳をこえ年長者となった彼の風貌にぴったりの役柄であった。こうしてデヴィッド・ガルピリルは、それぞれの時代を生きたアボリジナルを演じる。その彼と国立民族学博物館は、はやい時期からつながりをもっていたのである。

上：ステージにそろうダンスグループ。右から2人目がデヴィッド・ガルピリル  
下：躍動感あふれるデヴィッドのダンス

